

～2017年 秋・冬号～

OBON SOCIETY

家族が繋がり.... 心が癒される



マーヴィン・ストロンボさんと
日本のOBONソサエティ スタッフの遠藤さん。

マーヴィン・ストロンボさんの物語 第2話

冬の休暇の頃は、私達が手を止めて、とても忙しかったOBONソサエティの一年間を振り返り、またそのメッセージが世界中を駆け巡った驚くべき物語を思い起こすのに良い時期です。

8月11日

成田空港では、日本のテレビ報道関係者たちがマーヴィンさんを待ち受けていました。ホテルまでのバスの車内で、敬子さんがマーヴィンさんにこれからの旅程を説明しました。私達はマーヴィンさんが疲れ切らないよう、ゆるやかなスケジュールを立てていましたが、後にこれは全く不要だったと判りました。私達は慎重過ぎたのです。マーヴィンさんはエネルギーに満ち溢れ、これから始まる冒険をわくわくと楽しみにしていました。



私達はマーヴィンさんに、ホテルに着いたらすぐにベッドに入りぐっすり眠ってほしいと思っていましたが、彼は疲れを感じていませんでした。もうすでに22時間以上ずっと眠らず起きているのに、ご家族と共にたっぷり食事を摂り、人生で2回目となる日本酒を懐かしそうに味わいました。

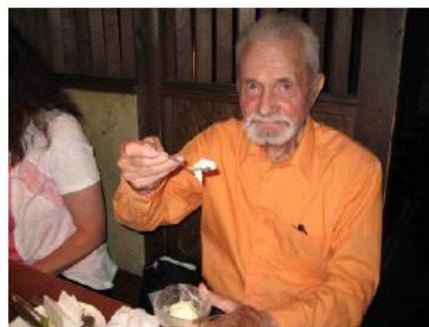
米と水から作られる口当たりの良い酒、日本酒を、マーヴィンさんは1945年長崎で初めて体験していました。家族やOBONソサエティのスタッフと共にアジアの料理を囲みながら、日本酒にすぐに馴染み、「あの時も、そして今も、酒が好きじゃ」と明言しました。「長崎で酒を飲んだ時から、全く飲んでないよ…ヘイッこれはいいぞ！」マーヴィンさんは叫びました。「さき(酒)をながさき(長崎)で〜っ！」

8月12日

お天気の良い翌日、朝早くから、マーヴィンさんはお腹いっぱい朝食を食べ、すぐにまた別のテレビ局のインタビューを受けました。



私達はマーヴィンさんが午後のお昼寝をしたいだろうと思っていましたが、とんでもない！彼は街を探検しに出かけて行き、すでに次の夕食とデザート、そしてお酒を飲む事も楽しみにしていたのです。



8月13日

マーヴィンさんの第2次世界大戦の知識は本で読んで学んだものではありません；彼は白兵戦で日本兵と戦ったのです。日本兵の勇敢さに敬意を払っていて、彼らを「戦士」と呼んでいました。

マーヴィンさんは日本には退役軍人のための国営の墓地が無く、代わりに日本兵の魂が帰属する神社があることを知っていて、高名な靖國神社に参拝したいと望んでいました。



神社の近くには太平洋戦線の展示物も含まれている日本の軍事博物館「遊就館」があります。マーヴィンさんはブレンダさん、エミリーさん、サンドラさんと共に日本のゼロ戦の前で記念写真を撮った後、アメリカと戦うために徴集された多くの兵士たちの顔写真をじっくりと時間をかけて眺めてから、その他の展示物の中を進みました。



マーヴィンさんは驚くほどのスタミナの持ち主でした。神社と遊就館を訪れたその足で記者会見に臨んだのです。日曜日の午後にも関わらず、沢山の報道関係者が彼の話を知ろうと待ち受けていました。



第2次世界大戦の退役軍人が戦地から持ち帰った記念の品を、5000マイルの距離を飛んで遺族に直接返還しに来たという話は、マスコミの心を掴み始めていました。

8月14日

今日は荷物をまとめて東京を出発します。私達一行は岐阜県の山あいの村へ入って行かねばなりません。マーヴィンさんははやる思いで5時間の移動に臨みました。最初に乗ったのは超近代的な高速新幹線です。



その日の午後、高山市に到着しホテルにチェックインしました。けれども休憩する暇はありません、マーヴィンさんを待ち受けている人達がいたのです。



マーヴィンさんは高山市長に招待されていました。大会議室のどっしりとしたテーブルに座って、娘さん達はお父さんを誇らしげに見ていました。

OBONソサエティは日本到着の当初からマーヴィンさんに同時通訳者をつけていたので、彼は全ての会話を理解し返答することが出来ました。きえこさんは朝から夜まで彼に寄り添ってくれ、お陰で彼はこの体験を満喫することが出来ました。



ご遺族を探すためにOBONソサエティの手助けをしてくれた田中宮司が、電車の駅でマーヴィンさんを出迎えてくれました。その後訪れた飛騨護国神社で、田中宮司は、翌日マーヴィンさんが返還する旗のお祓いをしてくれたのでした。



8月15日

翌日の朝早く、私達は旅の最終章へ向かって歩み出しました。電車に2～3時間揺られ、30分ほどバスで移動すると、マーヴィンさんはとうとうご遺族が住む山あいの村に到着したのです。優しく暖かい雨が降り注いでいました。

マーヴィンさんは、この旗を1944年の6月下旬に戦地で取得し、かれこれ73年以上保管していました。そして、今日のこの日、ご遺族へお返しします。

分かっているのは、マーヴィンさんはこれから、戦没兵士の93歳の妹と89歳の弟、そして82歳の妹にお会いするという事でした。



到着すると、安江辰也さんがマーヴィンさんを出迎えてくれました。お二人はもうすぐに、初めて出会った兄弟のように手を取り合い、お互いの腕を回し合って打ち解けました。



地元の自治体は5人の記者達が来ると教えてくれました。私達一行の誰も気付かぬ間にこの話は世界中に知れ渡っていて、カメラマンはマーヴィンさんと辰也さんに蜂の群れのようについて回りました。



その後、式典が執り行われ、数人の式辞が読まれた後、マーヴィンさんが旗を返す時がやってきました。彼が辰也さんに旗を手渡すと、辰也さんは旗を広げ、すぐに形見の品に顔をうずめました。後で辰也さんは、今も覚えているこの時代の兄の匂いを嗅ぎ取ろうとしたんだと教えてくれました。その後、旗は93歳のお姉さんに抱かれました。



マーヴィンさんは演壇に立ち、サイパン島で斃れた日本兵に出くわした“その日”の話を始めました。マーヴィンさんの話は一文ずつ日本語に訳されました。会場は水を打ったように静かで、ご遺族やその場に居た誰もが、マーヴィンさんの話に息をつめて聞き入っていました。



その後、辰也さんが立ち上がり、マーヴィンさんの尽力へ謝意を述べました。ご遺族は遂に、お兄さんが、いつ、どこで亡くなられたのか知ることが出来ました。またお兄さんが勇敢にも、戦地の最前線で斃れたと知り、感無量のようでした。



マーヴィンさんは、AP通信、ワシントンポスト新聞、星条旗新聞、ミリタリータイムズ、NHKの記者たちやその他の報道関係者からのインタビューを受け忙しく過ごしました。次いで別の記者会見や写真撮影も行われました。

辰也さんは、マーヴィンさんにご家族を、1600年初期に建てられたご自宅へ案内しました。辰也さんのお兄さんの旗は70年以上前にこの家から旅立って行ったのです。そこではすでに報道関係者たちが、マーヴィンさんの到着を待ち構えていました。



日章旗は、お兄さんのご遺影が飾られている神棚に謹んで供えられました。



そしてマーヴィンさんにご家族は、辰也さんご一家とテーブルに着き、地元で栽培された緑茶を味わいながら楽しく会話を交わしました。



マーヴィンさんは任務を完遂しました。辰也さんのお兄さんの形見の品はついに帰宅を果たし、ご遺族は誰も知らなかったお兄さんの最期を知ることが出来ました。とても心癒されるこの和解のための行動とメッセージは日本中、そしてアメリカ中へ伝わり、全世界をも駆け巡りました。

～2017年 秋・冬号～

OBON SOCIETY

アメリカへ帰国する前に、マーヴィンさんは娘のサンドラ・ウィリアムソンさんとブレンダ・ストロンボさん、孫のエミリー・ウィリアムソンさん、友人のジョセフ・タコブスキーさん一行と、この日本大旅行への旅の企画、調整、記録に協力したOBONソサエティのスタッフやボランティアと共に写真に収まりました。



OBONソサエティは、戦争の苦難を経験したご家族同士を繋ぎ、寄せ書き日の丸（日章旗）の返還を通してお互いの心に区切りをつけ、心の癒しと和解を提供することを使命としています。

OBONソサエティには日章旗返還などの依頼や問い合わせが数多く寄せられており、真摯な声に応えるべく日々努力しています。

ご家族を繋げる平和活動の賛助として、当団体へのご寄付を心から歓迎いたします。

〈ご寄付の郵送先〉
米国在住の場合、小切手での
ご寄付の宛て先です。

OBON SOCIETY
P.O.Box 282
Astoria, Oregon 97103

〈オンラインでは〉
クレジットカードまたはペイパルのア
カウントから、米ドル、日本円どちら
でもご寄付をして頂けます。

<http://obonsociety.org/jpn/page/support>

皆様の温かいご支援、どうもありがとうございます。